

明治・昭和前期の大凶作

近代においても農作物は、気候の影響によってたびたび凶作に陥りました。明治35年(1902)・38年(1905)に発生した凶作はともに冷害によるものであり、その被害の大きさから「天明・天保の頃にも劣らぬ凶作」とたとえられました。また農業復興支援政策としては北海道への移住が推奨されました。

明治38年の凶作は宮城県でも平年と比べて米の収穫量が90%以上減ったことから、人口の32%にあたる28万人が「^{きゅうみん}窮民」として救助が必要となる状況に陥りました。岩沼でも多くの人々が困窮した様子が『岩沼市史』資料編Ⅳに掲載されています。岩沼町では多数の孤児が発生し、彼らを救うために当時の佐藤富次郎町長の判断により岡山県の孤児院へ送り出しています。

昭和6年(1931)・9年(1934)・16年(1941)に発生した凶作もまた長雨や冷害によるものでありました。戦前の東北地方の凶作を伝える新聞紙上には「身売り」や「欠食児童」が社会問題として大きく取り上げられ、また農業復興支援政策として、中国東北部(満州)への移民を促していたことが伝えられています。なお、昭和9年の大凶作では名取郡の米の生産高は半減し、また米価も高騰したことから多くの困窮者が発生しました。

平成の凶作

平成に入ってから、気候不順に端を発した凶作は、私たちに襲います。特に平成5年(1993)に発生した凶作は、今でも「戦後最悪」と呼ばれる凶作であり、タイや中国、そしてアメリカなどから外国産の米が緊急輸入されたことを記憶されている方も多いかもかもしれません。この年は長雨と低温、そして日照不足のため、当時の岩沼市内の水田での主要品種であったササニシキは例年の1/3以下の出荷量となりました。市では冷害被害にあった農業者などへ様々な助成を行いました。



平成5年凶作時の被害確認の様子

また平成15年(2003)に発生した凶作は平成5年凶作に次ぐもので、こちらも冷害による米の不作と、病中害と湿害により野菜の生産も大きな打撃を受けました。

東日本大震災からの農地復興

平成23年(2011)に発生した東日本大震災では、壊滅的な被害があった岩沼市東部の水田をはじめとして、市内全域でも排水路損傷などの被害が相次ぎました。津波浸水を受けた水田などでは発生直後から排水やがれき除去、そして除塩が行われ、その後宮城県により水田面の大区画化を図るためのほ場整備が行われました。また、特に被害が大きかった排水機能については、藤曾根・相野釜排水機場の復旧のほか、三軒茶屋排水機場が新設され、排水機能の強化がはかられています。



がれきに覆われた長谷釜周辺の水田

第40回文化財企画展

凶歳と岩沼地域

2023年6月20日(火)～9月3日(日)



岩沼市早股の高林寺参道脇にある天明飢饉による餓死者の三十三回忌供養塔

企画展示について

今回の企画展のタイトルに用いられている“凶歳”という言葉は、現代を生きる私たちには耳馴染まないものかもしれません。この“凶歳”という言葉には、「農作物が実らない年」「不作の年」という意味ですが、農作物が不作ということは私たちが生きていく上で最も凶事のひとつとされてきたことが、この名称からもうかがえます。

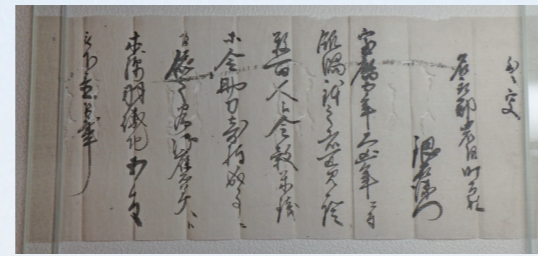
“凶歳”となる原因には様々なものがあります。天候不順によるものが最も多いですが、噴火や地震といった天変地異も原因にもなり、時としては合戦などの人災も含まれます。

そして“凶歳”の恐ろしいところは、その年だけの被害に留まらないという点にあります。特に米を中心とした穀物の収穫量をベースに市場経済が成り立っていた時代においては、農作物の不作が食料の供給のみならず地域社会そのものに大きな打撃を与えていました。人々は次に訪れる災厄である飢饉を予感して暗澹たる気持ちに陥ったことは想像に難くありません。

しかしながら、東日本大震災の復興からも分かるように、災害に対して人々は決して無力であったわけではありません。今回の企画展では、私たちが暮らす岩沼市域を中心に、江戸時代以降に見舞われた“凶歳”の被害と、祖先たちがどのように“凶歳”を克服してきたのか見ていきたいと思います。

宝暦の飢饉

宝暦5～6年(1755～56)におこった飢饉です。宝暦5年の夏は長雨と低温に見舞われ、洪水も発生しました。さらに早霜が重なり、東北地方太平洋側が大きな被害を受けました。仙台藩でも2・3万人の餓死者が、現在の宮城県北部域を中心に発生しました。

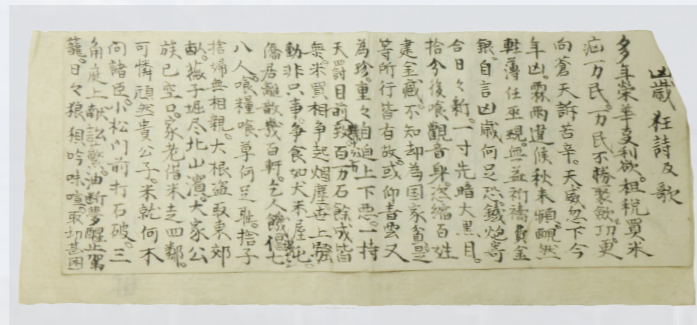


宝暦飢饉の際に金品を援助したことを示す史料

岩沼地域での被害状況は判然としませんが、宝暦6年(1756)頃に作成された飢饉に関する史料があります。史料には岩沼町の百姓が数百人の飢えた人々を援助したことが記されているため、岩沼地域もそれなりの被害を受けていたことがうかがえます。

天明の飢饉

天明3～4年(1783～84)におこった近世最大規模の被害をもたらした飢饉です。天明3年は春先から長雨に見舞われ、7月になっても厚着をしないといけないほど寒いという、厳しい冷害の年となりました。このため秋には大凶作となり、仙台藩では20万人ほどの餓死者が発生したと伝えられています。餓死者の中には飢えのために亡くなっただけでなく、墓石やお寺に残された過去帳の調査から翌年の春から夏にかけての死亡数が非常に多いことから、食料が無くて体力が衰えたところに疫病に罹って亡くなった人が多かったことが判明しています。



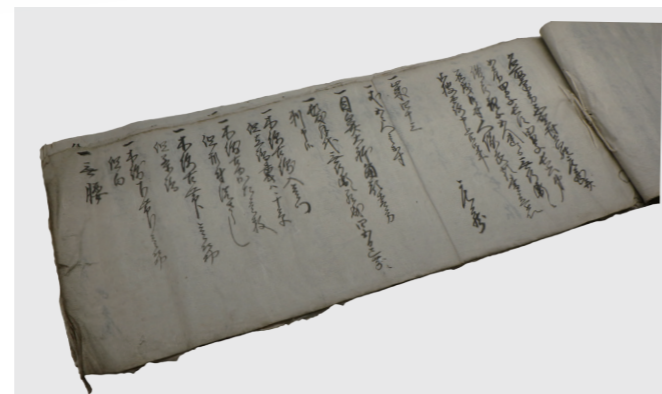
天明飢饉の際の岩沼の状況を示す史料

また天明の飢饉の際には、前年までに収穫した米のほぼ大半が江戸で販売するために運ばれており、領国内には蓄えがごく僅かしかなかったことも被害拡大の原因となりました。

岩沼地域については、『天明凶歳録』(宮城県図書館古典籍類所蔵資料)から状況がうかがえます。この記録からは、天明4年頃から飢えが深刻化し、食べ物求めて歩く者が1日に何十人もいて火付けや追いはぎも発生するなど、飢饉時の混乱した岩沼地域の状況がよく伝わってきます。

天保の飢饉

天保4～10年(1833～39)におこった飢饉です。この時期は長期間にわたり気候が不安定であったことが主な原因となりました。特に4年の冷害被害と洪水、そして早霜による大凶作、そして7年の冷害被害による凶作が短期間のうちに襲いかかり、大きな被害を受けました。仙台藩では7年の被害が大きく、特に牡鹿郡だけで6000人以上の餓死者が出たと伝えられています。



村ごとにつくられた行方不明者のリスト

岩沼南町の人数改帳を見ると、天保11年(1840)の総人数は天保2年(1831)から147人減少しており、飢饉の影響が推測されます。人口減少の原因は死亡や町外への移動のほかに、行方不明を指す「無行衛」があります。志賀村には天保8年(1837)から嘉永元年(1848)の間に21件の無行衛の記録があり、その半数が家族連れでの無行衛です。極貧や借金苦などが理由とし

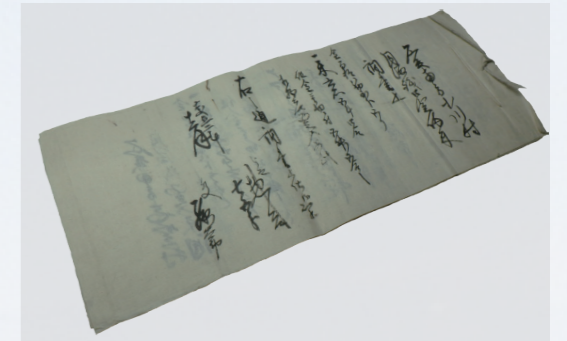
て記されているため、命は取り留めたものの経済的な事情により逃避したと考えられます。志賀村の作付事情に目を向けてみると、大凶作の翌年である天保8年(1837)は村の3分の1の水田に手を付けることができず、水田の回復にかなりの時間がかかりました。

岩沼地域で行われた備荒貯蓄

天保の飢饉以後、凶作・災害によって飢えや生活困難に陥らないための備荒貯蓄が、それ以前にも増して地域社会で取り込まれるようになりました。仙台藩でも村民が少しずつ米・雑穀・金銭などを出し合って共同で貯めていく、相互扶助の取り組みが行われています。

慶応2年(1867)は春ごろからの天候不順と、3月から7月の間に7度も起きた洪水によって大不作となり、岩沼地域でも多数の難渋者が出ました。備糶の拝借に頼るほかありませんでしたが餓死者はほとんどなく、人口も減少せず乗り切ったため、地域における備荒貯蓄が被害の軽減に機能したといえます。

岩沼地域でみられる備荒貯蓄としては月溜銭、備糶蔵、自分備糶の3つがあります。月溜銭は人頭百姓から月ごとに集めた金銭を大肝入のところで貯蓄して備えとする取り組みです。長岡村・小川村・志賀村で月溜銭を用いて「備米」を購入した記録が残っています。備糶蔵は火事の被害者や農事で入り用がある者への貸付など幅広く利用されていました。自分備糶は、一般的に「社倉」と呼ばれる、百姓たちが出し合った糶を村で管理する備荒制度です。



「備米」に関する資料



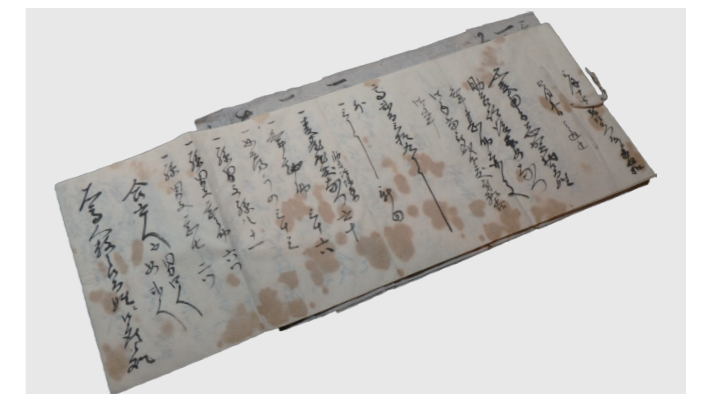
震災で解体した家屋から発見された「餓死囲い」

岩沼地域における赤子養育仕法の普及の経緯

寛政6年(1794)に名取郡では、南長谷村の半助と六三郎が赤子養育に関する独自の献策を藩に提出し、両人の献策は奇行な行為であるとして藩主に目通りを許され、この献策は直ちに名取郡内で広がっていきました。

その後、文化4年(1804)に仙台藩は領民に対する養育の教化、懐妊と出産の管理、養育料の支給を中心とする赤子養育仕法を制度化しましたが、南長谷村の半助と六三郎の献策が全藩的に実施される赤子養育仕法の下地となったことが注目されます。

天保の飢饉により制度の緩みが見られたことから、弘化2年(1845)3月には運用を引き締めるための指示が藩より出されました。特に出生子の高人数御改帳への記載に漏れがあるとして、今後は懐妊・出生のたびに肝入や赤子制道役が帳面に記録し、高人数御改帳作成の際に藩役人が内容を確認するという手続きを定めています。また、藩は子だくさんの家族の賞賛を行いました。



赤子養育に関する資料